展示・収蔵品より

美を知る 262

企画展「美の交差点　博覧会とあきたの工芸」

確かな技に高い評価

県立博物館（秋田市）

開国後の明治期、博覧会は日本の重要な殖産興業政策の一つであった。当時、さまざまな物品が海外で展示され、特に評価が高かった工芸品は有力な輸出品と目された。

写真1の4点は、江戸、明治期に作られた能代春慶である。職人の石岡庄寿郎は江戸時代、秋田藩の御用を務めており、会席膳や文箱など武家所用の高級漆器を多く生産した。器形は、当然ながらオーソドックスなものである。ところが明治以降になると、万国博覧会への出品をきっかけに、曲線を多く取り入れた器形やグラスなどの西洋的な容器が登場した。

能代春慶は、明治政府が初めて参加した1873（明治6）年のウィーン万国博覧会で有功賞（3等に相当）を受賞（写真2）、輸出品として大いに期待された。博覧会関係の記録をひもとくと、明治以降、能代春慶以外にも秋田から相当数の工芸品が国内外の博覧会へ出展したことが分かる。

秋田蕗摺（ふきずり）もその一つ。写真3は、2代目宮越精之進による「安喜多富貴印葉図」で、学習院女子大の今橋理子教授の研究によると、77（同10）年の第1回内国勧業博覧会に出品された作品である。繊細な葉脈と伸びやかに広がる葉が鮮やかに摺られ、100年以上たった今もほとんど色あせていない。

宮越家は代々秋田市で蕗摺を制作し、現在は5代目の力氏が受け継いでいる。そもそも博覧会出品作は、基本的に買い上げもしくは売却されるため、行方が分かっているものは少ない。しかしこの受賞作は、名古屋市東山動植物園に現存していた。さらに力氏の元に、褒状（写真4）が残されており、出品作と褒状2点が照合された形となった。

作品を買い上げたのは、名古屋出身の博物学者で日本初の理学博士となった伊藤圭介（1803～1901年）である。彼は内国勧業博覧会の審査員を務めていた。伊藤は工芸作品としてだけでなく、植物学的な観点からも宮越の作品に興味を持ったのだろう。秋田ブキの植物的特徴や産地、地元での利用法など詳細な情報を、直接受賞作品に書き記している＝写真3右上、同下。当時の日本において、秋田蕗摺が代表的な工芸品の一つと評価されたことを示す貴重な資料である。

こうした資料を通して秋田の工芸品を読み解いていくと、それぞれに垣間見えるエピソードがあり、その時代に生きた工芸の姿が鮮明となる。能代春慶、秋田蕗摺の他にもさまざまな秋田の工芸品が博覧会に挑戦しており、その様子は本企画展で紹介している。ぜひこの機会に、新たな知見に触れると共に、秋田の工芸品が紡ぎ出す物語とその魅力に注目していただきたい。

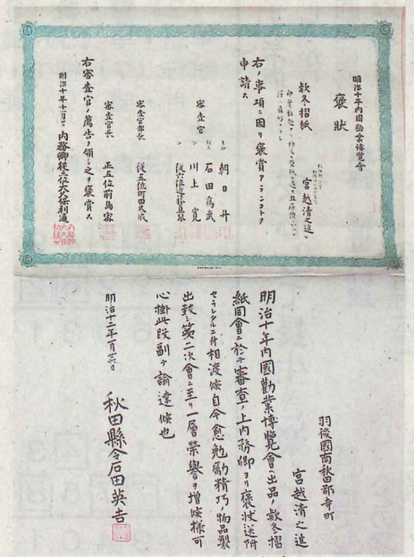
（県立博物館学芸主事・斉藤洋子）

①硯箱（江戸時代、長さ24.4センチ×幅16.6センチ×高さ3.9センチ）
②足打角切折敷（江戸時代、縦横24.3センチ×高さ23.3センチ）
③馬上盃（明治時代、口径5.2センチ、台の直径4.3センチ、高さ9.5センチ）
④猫足葵盆大膳（明治時代、直径58.4センチ×高さ23.4センチ）
①は県立博物館蔵、②～④は能代市教育委員会蔵

写真1

写真2　ウィーン万国博覧会で能代春慶が有功賞を獲得した時のメダル（直径7センチ、個人蔵）

写真3　宮越精之進作「安喜多富貴印葉図」　縦76センチ×横74センチ　名古屋市東山動植物園蔵



明治十年内国勧業博覧会褒状
褒状
欽本摺紙
宮越清之進
右ノ事項ニ因リ褒賞アラシコトヲ申請ス
出品者氏名
宮越清之進
右審査官ノ鳳告ノ頃之ヲ褒賞ス
明治十年十月
内務卿従二位大久保利通
内務卿従二位大久保利通
羽後国雨宮郡青町
宮越清之進
明治十年内国勧業博覧会出品ノ欽本摺紙同会ニ於テ審査上内務卿ヨリ褒状送付セラレタルニ付相渡候自今愈勉励精巧ノ物品製出致度二次会ニ至リ一層栄誉ヲ増候様可心掛此段副ヲ諭達候也
明治十年十月
秋田県令石田英吉

写真4　1877（明治10）年の第1回内国勧業博覧会で受賞した時の褒状（宮越力氏蔵）

メモ　企画展「美の交差点　博覧会とあきたの工芸」は6月30日まで。博覧会と秋田の工芸が交差した歴史的な背景を踏まえ、関連資料や実際の工芸品など約250点を展示している。入場無料。開館時間は午前9時半～午後4時半。月曜休館。県立博物館☎018・873・4121